

ハイチ・大地震後の現地視察

大地震から3カ月が経過したハイチに、須藤シスターとシスターを取材するNHKの取材班に同行し、現地を視察してきた。現地に滞在できたのは、4月20日から26日までの短い期間ではあったが、ハイチの結核医療の拠点でもあるGHESKIO(ゲスキオ)やその関連施設である研究所、保健省の管轄であるNTP(National TB Program)、日本大使館の方々にも面会し、シスターが34年前に設立されたシグノの結核サナトリウムの視察にも行った。

首都ポルトープランスは、震災後3カ月たったとはいえ、街は瓦礫の山。瓦礫を撤去した後に、無数のテント村が広がっている。各国の支援によるしっかりとしたテントもあるが、自分たちが拾ってきた木材と布で今にも崩れそうなテントに家族が寄り添うように暮らしている人がほとんどだ。街のあちこちで手作業で瓦礫を運び出し、リヤカーで運んでいる人々を目にした。

GHESKIOのDr.Popによると、すでに震災前から結核の高蔓延国であったハイチで、この震災により治療は中断され、密集したテント生活でますます感染が広がる恐れが高く、薬の中断によるMDR-TBの発症や感染は脅威となっているとのこと。GHESKIO自体も病院のいたるところが崩壊し、まだなんとか使える場所でHIVと結核の二重感染者の治療にあたったという状況だった。この混乱の中、なんとかか患者を見つけ出し、治療を続けることが緊急の課題となっている。

23日にレオガンへ移動し、須藤シスターが所属する修道会に滞在した。この修道会でシスターは自立支援のための農業支援GEDDH(ジェッド)を主催している。シスターがハイチへ戻って来られたことを期に、GEDDHのメンバーが集まり震災後初のミーティングが行われ、ここでシスターは農薬がいない木酢を使った農業を教えている。メンバーは他に職業を持ちながら、この活動に賛同し、シスターとともに植林や農業を学んでいる人々。このGEDDHが農業学校を作る予定だった場所には、震災後家を失った人々がテント村を作っていた。シスターが34年前に日本の無償援助で作った結核サナトリウムも崩壊し、敷地内にテントを張っての患者の看護。ハイチはこれから本格的な雨季にはいり、サイクロンも危惧されている。テントで暮らす人々や患者にせめて安全なプレハブ住宅ができればと切に願うばかりである。